

中国語と日本語の主題表現比較

- 「是」と「は」 -

谷守正寛*・趙微微**

Comparison of Topic Expression in Chinese and Japanese

- SHI and WA -

TANIMORI Masahiro* and ZHAO Wei Wei**

キーワード：主題，は，是

Key Words: Topic, WA, SHI

1 はじめに

本研究の目的は、中国語の「是」と日本語の「は」を比較することによってその共通点を探ることである。「は」についての先行研究は数多くあるが、中国語の主題表現とではどのような共通点があるのかについて細かく比較、検討されたものは管見の及ぶところあまり見られない。そこで、日本語の「は」を使った様々なタイプの主題文が、中国語の表現、特に「是」を含む文によってどのように表されるのかを観察し、考察することにする。

2 主題文と無題文の日中比較

ここでは、「は」の本質について考察することが主な目的ではないので「は」に関する先行研究についての比較検討はしないが、簡単に主題についてふれておく。

- (1) 私がこの本を書きました。
- (2) 私はこの本を書きました。
- (3) この本を私が書きました。
- (4) この本は私が書きました。

(1)の「私が」を主語とし(2)の「私は」を主題ということにする。さて(3)の主語は変わらず「私が」であるが、(4)の主題は「この本は」である。言うまでもなく、このように、主語と主題は同

*国際交流センター助教授(日本語教育)

**教育学研究科学生

じ論理的内容を表す文内にあってもつねに一致するわけではない。

次は『枕草子』からの「は」を含む典型的な主題文であろう。中国語に訳す。

(5) 春はあけぼの。 说起春天要属朝阳。

中国語での意味は「春といえばあけぼの」である。一般に日本語文での解釈は「春はあけぼのがいい」といったようなものであるが、日本語文には「春」と「あけぼの」のほかには「は」しかなく、ほかに何かを述べる述語は存在しない。次を見られたい。

(6) 僕は学生。 我是学生。

「我」が「学生」と同一の関係にある。「は」は一見「是」に相当するかに見える。つまり「是」は二つの同一のものを結びつける働きがある。ところが、(5)の「春」と「あけぼの」の間には同一の関係がない。春は季節でありあけぼのは一日のうちの時間帯である。このようにみると(5)の「は」が特殊なものであると分かる。そこで(5)に「是」を入れて訳してみよう。

(7) 春天是朝阳。

ふつう(7)は言わないが、次の文から縮約された文とみれば、古典的な語感がするものの文として成立する。

(8) 春天是朝阳最美。

これは「春はあけぼのが一番いい」という構造である。この「是」は(6)の「是」とは働きが異なる。したがってこのような「是」には「は」に通ずる性質が含まれるのではないかと考えられる。

そこで様々なタイプの日本語の主題文を「是」で中国語に訳し、比較・分析することによって「は」と「是」の共通点を吟味してみよう。

(9) 鳥は飛ぶ。 鸟飞。

これは日本語文と同じ構造だが中国語では意味的に不完全であり、ふつう次のような言い方をする。

(10) 鳥は飛べる。 鸟会飞。

次の現象描写文はそのニュアンスを中国語で表現することが可能である。

(11) 鳥が飛ぶ。 鸟要飞了。

これは鳥が飛ぶところをとらえて述べた文である。この場合「是」を使うことはできない。では「是」を入れて訳せばどうなるだろうか。

(12) 鳥是飞的。

これは「鳥は飛ぶものだ」という意味に近い。「鳥は飛ぶ」も実は「鳥は飛ぶものだ」と同じニュアンスがある。つまり鳥についてそれがどのようなものであるかを説明している。その点で「是」は「は」にどこか通じるところがあるようである。ただし中国語では文末に「的」が付随する。

形容詞文の場合をみる。

(13) 富士山は美しい。 富士山很美。

これに「是」を入れて訳した(14)を日本語ではどのように述べるだろうか。

(14) 富士山是很美的。

まずここで中国の教科書では「は」についてどのように説明されているのか、次に引用する。

「～は～です」

是此句型相当于汉语的“～是～”。「は」起提示主题的作用。 (徐(2001) p.52)

上の説明は「この慣用形は中国語の『～是～』に相当の意味である。主題を提示する役目をもつ。」と述べている。これに従えば「是」が主題を提示すると理解されよう。たしかに一般に中国人学習者は「は」を中国語の「是」と関連づけて考えがちだと思われる。

また、『日中・中日辞典』（小学館）に「是」についての次のような説明がある。

（肯定を強く押し出す）...のだ...のである。

（a）形容詞・動詞を目的語にとる。確かに...だ。

昨天是冷，一点不假 / きのうは確かに寒かった，まったくその通りだ。

没错儿，他是走了 / まちがいっこなし，彼は確かに行ってしまった。

このような性質を考えれば、「富士山は美しいものだ」と言わない以上、(14)の「是...的」は「～は...ものだ」ではなくただ主語についての肯定的内容を強く押し出して述べたものともいえよう。この機能を「強調」と呼んでもよい。特に、いくつかの山の中で富士山を取り立てて強調した場合には「が」が表れるが、辞典の例文では「きのうは」や「彼は」のように「が」でなく「は」が表れている。つまり、「強調する」とみなした場合でも「是...的」が「は」と「が」を選ばないことになる。実際、次のような場合でも「是...的」を問題なく使うことができる。

(15) どの山が美しいですか。 富士山が美しいです。

哪一座山是最美的？ 富士山是最美的。

(16) (相手に紹介しながら) この人が田中さんです。

(一边向对方介绍) 这个人是田中。

これを見てわかるように、「是... (的)」が「は」に対応するわけではなく「が」で主格を表示する文の訳文としても問題なく使える。「是」に関する一般の説明では「が」について十分に語っていないか、説明が必ずしも正確とは限らないのである。上にもみたように、「是」が日本語の「は」に相当すると思われがちだが、その根拠はまだ十分にはないとみたほうがよいだろう。

3 ウナギ文について

日本語の教材等にある例文を使ってそれが「ウナギ文」（奥津 1978）にできるかどうかをみよう。

(17) 僕はギョウザだ。我吃饺子。（『日语惯用句型手册』大连理工大学出版社）

「僕はギョウザだ」は典型的なウナギ文であるが、上の中国語文ではただ「僕はギョウザを食べる」という動詞文として訳している。そこで「是」が使えるかどうかみる。

(18) 我是吃饺子。

このように「是」を日本語の「は」の位置に置くことはできる。ウナギ文の「は」が中国語の「是」で表現可能かどうかはあまり指摘されなかったと思うが、こうした特異な「は」について中国語の「是」の対応する余地があるかどうかという考察は重要である。さて実は(18)はまだ完全なウナギ文とは言いがたい。動詞「吃」によって動作が表現されているからである。では動詞「吃」を省いた文がはたして可能かどうかをみてみよう。

(19) (3人の会話)

— 我吃馒头。

— 我吃春卷。

— 我是饺子。

- 私は饅頭を食べる。

- 私は春巻きを食べる。

- 私はギョウザだ。

上のように、第1・第2の発話者が述べた後に、ウナギ文によって「私はギョウザだ」と述べるのが実は中国語でも可能なのである。ウナギ文が日本語特有の特殊な構文であると思われがちであるにも関わらず、中国語の「是」によってもウナギ文が表現できることは興味深い。この現象から「是」が「は」の特異な機能を共有する可能性のあることがわかる。

(19)の場合はヲ格名詞句がウナギ文の述語成分になっている。ヲ格は中心的な格であるが、それ

以外の格についてもウナギ文が成立するかどうかを吟味してみよう。いずれも2人の会話である。

- (20) 我去东京。私は東京に行く。 我是大阪。私は大阪だ。

上のウナギ文においては、行き先が「是」によって「我」と結びつけられている。このような副詞的要素(行き先「～に」)もウナギ文の述語になることで、「是」と「は」の共通点がいっそう強まる。

- (21) 我和小金一起去。私は金さんと行く。 我是和小李。私は李さんとだ。
 (22) 我从韩国来。私は韓国から来た。 我是(从)中国。私は中国(から)だ。
 (23) 我和爸爸一起去。私はパパと一緒に行く。 我是妈妈。私はママとだ。
 (24) 我工作到五点。私は5時まで仕事をする。 我是(到)六点。私は六時(まで)だ。
 (25) 我能游到五百米。私は五百 m まで泳げる。 我是(到)一百米。私は百 m (まで)だ。
 (26) 我开车到京都。私は京都まで運転する。 我是(到)东京。私は東京までだ。
 (27) 我坐飞机去。私は飛行機で行く。 我是坐船。私は船でだ。

このように、時を表す要素、ト格、カラ格(場所と時間)、トイッシュニ格、マデ格(時間と到達点)、デ格(手段格)なども「是」によって「我」と結びつけられることがわかった。こうした格や副詞的要素について中国語でもウナギ文が成立することや、格助詞が省略できる点でも類似していることから、両者のこの用法にはかなりの共通性があると言えよう。

次に「是」につづく述語成分が格をもたない副詞的要素の場合をみよう。

- (28) 我早上学习。私は朝勉強する。 我是晚上。私は夜だ。
 (29) 我的工作已经完了。もう仕事を終えた。 我是还没。私はまだだ。
 (30) 我看过两遍。私は二回見たことがある。 我是三遍。私は三回だ。

このように、副詞的要素についてもある程度のものまでは中国語においてもウナギ文が表現可能であることが分かる。さらに次のように、複文の従属句内の動詞の補語についてもウナギ文が成立する。

- (31) 我蘸酱油吃。私は醤油をかけて食べる。 我是盐。私は塩だ。
 (32) 我经过北京去日本。私は北京を経て日本に行く。 我是上海。私は上海だ。
 (33) 我一边喝茶一边看书。私は茶を飲んで本を読む。 我是咖啡。私は珈琲だ。

ここまでみてきたように、中国語においてもさまざまな文成分をウナギ文の述語として表現可能なことを明らかに示すことができたと思う。ウナギ文の研究(奥津 1978)では「だ」の機能として分析されているが、本稿ではむしろ「は」と「是」の特異な共通機能としてとらえた。

4 「象は鼻が長い」と雑例について

まず「象は鼻が長い」構文について、日本語と中国語の表現を比較しよう。

- (34) 象は鼻が長い。象, 鼻子很长。

この場合、日中両文は構文的にそのまま対応する。「は」の部分は中国語では無表示かコンマで表示され「が」の部分は無表示である。そこで「是」を入れてみよう。

- (35) 象, 鼻子是很长的。

この文のニュアンスには、象について「鼻が長いこと」を強調して説明する感がある。ただし主題がコンマによって示され、「是」はむしろ「が」に対応する。なお、次のように訳すことも少くない。

(36) 象的鼻子很长。

これは「象の鼻は長い」という意味になり「象は鼻が長い」とは基本的に意味合いが異なると本稿では考える。ここでは「象的鼻子」から「象」が主題化されたかどうかについてはふれない。

次に、三上(1960)の指摘する雑例を中国語に訳し、比較・検討してみよう。

(37) この臭いは、ガスが漏れている。这种气味是煤气漏了。

この場合「この臭い」と「ガス」との間に「象」と「鼻」のような関係がないにもかかわらず「是」をそのまま「煤气漏了(ガスが漏れている)」の前に入れることができる。またこの場合「是」は必須である。このタイプの文では「是」と「は」との相互関係が強くみてとれる。この「是」は「が」に対応させることはできない。ほかの雑例についても中国語に訳し、吟味してみよう。

(38) あれは、絶対にアメリカが悪い。那件事是,美国的不对。

(39) それは、先方の言い分がもっともだ。那件事是,对方说的理所当然。

こうしたタイプの主題文の雑例の場合においては「是」が「は」に対応することが分かった。

「～は～が…」のタイプについてさらに分析を進めよう。

(40) 鳥取は梨がおいしい。在鸟取梨很好吃。

これは「鳥取では梨がおいしい」となり、日本語の「鳥取は」は「鳥取では」の場所格「で」が省略されたものとみなせる。ところがこれに「是」を使用することが可能である。

(41) 在鸟取梨是很好吃。

これについては、先に見たように「強調」のはたらきがあるといえるが強調しているのは梨である。つまり「是」は「が」に対応する位置にくる。「是」が「は」ではなく「が」に対応する位置に来ることをみた上で次の訳文を見ると興味深い。

(42) 鸟取是梨很好吃。

今度は「は」に相当する部分に「是」が表れる。そしてこの「是」を消去すると非文法的になる。

(43) *鸟取梨很好吃。

これが文法的とすれば主語が「鳥取梨」という固有名詞の場合だけである。こうしたことから考えると、やはり(42)では「是」が主題を取り立てていると考えられる。このような機能があるとすれば、「が」の部分に相当する「是」とは機能が異なることになる。画一的に「は」と「是」の対応関係を立証するつもりはないが、ある部分では主題の取り立てに近い機能がうかがえたり、ある場合には「が」に相当する位置に来ることを考えると、「是」には部分的に「は」の機能を請け負ったりしながらも、「が」の主格の機能も請け負うと予想できる。「は」に「が」の主格の代行をする機能があるように、両機能は截然と区別されるものではないのだろう。

(44) 鸟取, 梨很好吃。

これは「是」が「,」に置き換えられた文である。こうしたことは次のように日本語においても見られる現象である。その点で「は」と「是」の類似点が追認されるとみてよいだろう。

(45) 私, あんこが嫌いなんです。

もう少し実証してみよう。

(46) a. 日本是树木很多。日本は緑が多い。

b. 日本, 树木很多。*日本, 緑が多い。

中国語では、このように場所を主題に取り立てて言える点で日本語とは異なる。もっとも主題が無生物であって日本語でも表現可能な場合がある。

(47) このコンピュータ, 日本製だ。这个电脑, 日本制。

中国語でも問題なく言える。主題がどのような場合にあるいは述語がどのような場合に「,」によって取り立てることができるかについてはここでは省略するが、いずれにしても「は」と「是」がともに「,」で置き換えられるという点から考えて、両者がある共通点を持っているとみてさしつかえないだろう。

5 主題が対象の場合

ここで、「是...的」についての説明を刘月华・潘文娉・故韦华(1991)から次に引用する。

“是...的”構文(1)における“是...的”の中に入るものは主に動詞か動詞フレーズ、或いは動詞を述語とする主述フレーズである。述語は動作が過去において既に実現或いは完了していることを表すが、述べようとする重点は動作自体にあるのではなく、動作の時間や場所、やり方、条件、目的、対象、仕手等、動作に関係する何らかの側面にある。...(中略)...“是...的”構文(2)は主に話者の見方や見解、態度等を表すのに用いられる。述語はふつう主語に対す解説や説明の働きをする。“是”と“的”はともに語気を表すが、文によって表す語気も異なる。

上の説明においてとりわけ注目されるのは「述語はふつう主語に対す解説や説明の働きをする」という部分である。これは日本語の「は」の性質に通じるものである。この説明にしたがって、主題が対象を表す文について、改めて「是」と「は」の対応を観察してみる。

(48) 切符は私が買った。车票是我买的。

(49) 切符を私が買った。车票我买了。

上の2文について解釈するならば、(48)の場合、「切符」を主題に取り立ててその切符がどのような経緯でここにあるのかを解説する部分が後に続く。一方、(49)の「切符」は買うという動作の対象でしかない。「是」を使うことによって「は」のもたらず効果が中国語文においても生じている。そのことを上の説明が言い表している。もっとも「主語」という用語は中国語においても「主題」と言い換えた方がよい。

主題がヲ格名詞句(対象)に由来する次の例文をみられたい。

(50) この本は私が買った。这本书是我买的。

(51) あの映画は昨日見た。那个电影是昨天看的。

こうした主題が中国語でも日本語のように表現可能である。しかも形式上「は」に相当する位置に「是」が置かれる。「是」が「は」の働きをしているようにもみえる。ただし文末に「的」が来る。さて、

这本小说借来的／この小説は借りてきたのだ。

车票我买的／切符は私が買った。

(『日中・中日辞典』小学館)

においては「是」がなく主題の後に入れてもよいが必須ではない。「この小説」「切符」は特定の小説・切符をさし、小説・切符一般を指すわけではない。ここで予想されることは、主題が特定のものでありそれについての一般論となる場合に主題の後の「是」が必須となるのではないか、ということである。検証してみよう。

(52) 人間は神が作った。人类是神造的。

(53) 二酸化炭素は植物が吸収する。二氧化碳是植物吸收。

上の例文では「是」が表れるが「是」を省略すると次のように非文法的となる。

(54) *人类神造的。

(55) *二氧化碳植物吸收。

主題が特定のををさす前出の次の文と比べてみよう。

(56) 切符は私が買った。车票我买的。

上の主題「切符」は特定の対象であり「是」がなくても文法性が保たれる。「是」が任意であることは次の文で確かめられる。

(57) 切符は私が買った。车票是我买的。

主題が抽象的な対象の場合をみてみよう。

(58) 神は人類が信じている。神是人类信仰的。

「神」は特定のものではないが、特定のものとすることによって「是」の必須性が次のようにリセットされる。次の「是」は任意である。

(59) この神は誰も信じない。这个神(是)谁也不信的。

ここまでの考察から、述語の動詞の対象としての主題の性格によって「是」が必須か任意かになることが分かった。

6 主題が対象以外の場合

最後に、主題が対象でない場合をみておこう。

(60) 会場は案内図を見てください。

a. 关于会场, 请看路线图。

b. 关于会场是, 请看路线图。

上の主題「会場」と「見て」という動詞との間には格関係が存在しない。このような場合でも日本語では主題を「は」で表現できる。(60 a)の「关于会场」の後に「,」が置かれているが、このことは「关于会场」が中国語でも主題であることを示している。(60 b)では「是」が表れている。ただし「关于会场」は「会場について」という意味なので「会場」そのものを主題として書き換えてみよう。

(61) 会場は案内図を見てください。

a. 会场, 请看路线图。

b. 会场是, 请看路线图。

このように言い換えても中国語で問題なく表現可能である。中国語においても日本語と似た言語環境で主題を取り立てることができるのは興味深い。

(62) 会場の案内図を見てください。请看会场的路线图。

(62)では話者は聞き手がどのような状況にあるかに関わりなく指示を発している。一方、(61)の主題文の場合は、聞き手が話題となっている会場を訪れようとしているといった何らかの態度を起そうとしている状況がある。話者はそうした事態に対して説明するかのよう命令文を発している。両者は異質な文なのである。

主題が先に見たヲ格以外の格関係にある場合をみよう。

(63) a. 電車で会場に行く。座电车去会场。

b. 会場に(は)電車で行く。会场(是)座电车去。

(64) a. 話は図書館でできない。说话不能在图书馆。

b. 図書館で(は)話ができない。图书馆(是)不能说话的。

- (65) a. 留学生が中国からたくさん来る。有很多留学生从中国来的。
 b. 中国から(は)留学生がたくさん来る。从中国(是)有很多留学生来的。
- (66) a. 新幹線で東京まで行く。我坐新干线去到东京。
 b. 東京まで(は)新幹線で行く。到东京(是)坐新干线去。

上の文では、「会場に」「図書館で」「中国から」「東京まで」がそれぞれ、行き先、場所、起点、到達点を表す補語であり、a文からb文に変換すると主題化され文頭に置かれる。中国語においてもこれらが主題化されると日本語と同様に文頭に移動しているのが分かる。

このように、二格、デ格、カラ格、マデ格を持つ補語については、中国語においても主題化が日本語と似た手順で文頭に置かれることが実証された。なお、日本語と中国語とで同じ振る舞いをしない格も存在する。次を見られたい。

- (67) a. 私のパソコンは君のと違う。我的电脑和你的不一样。
 b. 君のとは私のパソコンは違う。*和你的的是, 我的电脑不一样。
- (68) a. 今年は去年ほど暑くない。今年没有去年那么热。
 b. 去年ほどは今年暑くない。*去年那么是今年没有热。

上のト格、ホド格を含む成分を主題として文頭に置くことは日本語では可能だが、中国語では非文となる。これは、ト格・ホド格で比較される対象よりも比較の主体を中心にとらえるのが自然だからだろう。

次に副詞を主題にする場合についてみる。

- (69) a. この仕事はすぐにできない。这个工作不能马上完成。
 b. すぐにはこの仕事はできない。马上是不能完成这个工作的。
- (70) a. 右に行ける。能往右走。
 b. 右には行ける。往右是能走。
- (71) a. 12時までで起きている。12点以前不睡觉。
 b. 12時まででは起きている。12点以前是不睡觉。
- (72) a. 私はお金が少しある。我是有一点钱。
 b. 少しはお金がある。*一点是, 我有钱。

上にみるように、「すぐに」「右に」「12時まで」の場合中国語でも主題化することができる。一方、「少し」については主題化ができない。このようなことから、副詞に関して中国語は主題化について同じ振る舞いをする場合としない場合とがあるといえる。(71)については、12時より後には眠るかもしれないという点で対比的意味合いを持つが、中国語においても同じ意味合いを含むことから、「是」が主題化と対比の表現をも兼ね備えていると予想できる。

7 まとめ

本稿では、中国語の「是」と日本の「は」を比較し、様々な主題文について表現の類似する部分を分析した。「是」のふるまいを観察し考察した主なことをまとめると次のようになる。

「是」が「は」のごとくとらえられてきたが「が」に対応する場合もある。

「是」がウナギ文の「は」が持つ特異な機能がある程度共有する。

「象は鼻が長い」構文や雑例についても「是」が「は」に対応しうる。

主題が対象でない場合も「是」が「は」に対応する場合がある。

本稿では「是」の主題提示の機能を細かに示しつつ、「是」と「は」の関係について少しく考察を進めることができたと思う。

参考文献

- 奥津敬一郎(1978)『「ボクハウナギダ」の文法』くろしお出版。
三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版。
徐 敏民(2001)『基础日语1』上海三联书店。
北京・对外经济贸易大学・北京・商务印书馆・小学馆(1987)『日中・中日辞典』小学館。
刘月华・潘文娉・故韦华(1991)『現代中国語文法総覧(下)』くろしお出版。

(2006年1月10日受付, 2006年1月26日受理)